

自分の関わる日本語教育プログラム像を描いてみよう
—プログラム可視化テンプレート試用版を用いて—
Visualizing the Japanese Language Program
Using the Program Description Template in Language Education

徳永あかね（神田外語大学）・大河原尚（大東文化大学）・遠藤藍子（開智国際大学）・
小池亜子（国士舘大学）・菅谷有子（東京大学）・田中和美（国際基督教大学）・
中河和子（トヤマ ヤポニカ）・札野寛子（金沢工業大学）・ボイクマン総子（東京大学）・
松下達彦（東京大学）・古川嘉子（国際交流基金）

TOKUNAGA Akane (Kanda University of International Studies), OKAWARA Hisashi (Daito Bunka University), ENDO Ranko (Kaichi International University), KOIKE Ako (Kokushikan University), SUGAYA Yuko (The University of Tokyo), TANAKA Kazumi (International Christian University), NAKAGAWA Kazuko (Toyama Japonica), FUDANO Hiroko (Kanazawa Institute of Technology), BEUCKMAN Fusako (The University of Tokyo), MATSUSHITA Tatsuhiko (The University of Tokyo), FURUKAWA Yoshiko (Japan Foundation)

要 旨

日本語教師は自身に関わるプログラムの社会的背景・使命・目的を認識し、その構成要素、カリキュラム・シラバス、教授活動の全体像を把握した上で授業にあたるべきである。今回、筆者らが開発したプログラム可視化テンプレートを用いて、自身の日本語教育プログラムを記述することにより教育活動を見直す視点の獲得につながることを確認された。また、テンプレートは対話ツールとして、現場の課題解決のツールとなる可能性が示唆された。

Every teacher of Japanese should approach teaching with an understanding of the whole program, i.e., its mission, goals, components, and curriculum. Based on this idea and after conducting a relevant workshop at the forum, we confirmed that using the “Program Description Template in Language Education” which we developed will provide a helpful framework to the participants, and will encourage them to improve their language program. This template would also be useful as a tool for communication and problem solving among the program members.

【キーワード】 プログラムの可視化, テンプレート, プログラム論, 対話ツール

1. はじめに

本稿では、毎回の授業の一連のまとまりをコース、複数のコースのまとまりをプログラムとする。本来、日本語教師は自分が教えるコースが属する日本語プログラム全体に課されている使命を認識し、担当コースの位置づけと達成すべき目標を把握した上で各回の授業にあたるべきであろう。しかしながら、現行の日本語教員養成カリキュラムでは、コースデザインを学ぶ機会はあるが、プログラムの使命やコースの位置付けを理解した上で授業運営を学ぶ機会は皆無に等しい。その結果、実際に日本語教師になった後、日本語学や

言語学・教授法などの学習経験しかない条件下でも現場のマネージメントまで任されることとなる。

また、日本語教育プログラム主任や地域日本語コーディネーターのようなプログラムの運営責任者同士が、組織内あるいは類似機関の関係者と互いにプログラムの情報を共有し比較できる手立てがあれば、より効果的かつ効率的にプログラム運営ができるであろう。しかしながら、現状では異なる機関の関係者間でプログラムについて語るための共通の枠組みが存在しない。

そこで筆者らは、日本語教育学会実践研究フォーラムにおいて日本語教育関係者を対象とした体験型セッション（以下「セッション」）を企画し、以下の課題を立てて「プログラム可視化テンプレート」（以下「可視化テンプレート」）の試作版を用いて、プログラム記述の有効性を明らかにすることを目指した。

課題1:自身が関わる日本語教育プログラムについて記述することが、そのプログラムの使命や構成を認識し、自身の日本語教育活動を見直す視点の獲得につながるのか。

課題2:可視化テンプレートは日本語教育現場のどのような目的や機会に活用できるか。

課題3:可視化テンプレートをどのように改善できるか。

本稿ではまず、可視化テンプレートの開発経緯と概略について述べる。次いで、セッションの概略とその参加者から得られたフィードバックについて報告し、最後にセッションを通して得られたプログラムを可視化することの意義や今後の課題について述べたい。

2. 開発の背景と経緯

筆者らの研究グループ^{注1}では、2004年より言語教育プログラムの運営方法や評価について文献講読や学会でのパネル発表（隈井ほか2009）などを続けてきた。しかし、プログラム運営について議論したり評価を行ったりするためには、まず日本語教育関係者が俯瞰的にプログラム像を捉えることが必要である。また、特に海外に派遣される日本語教師の中には、派遣先のプログラム全体像が見えないまま、運營業務を任されるケースもある。このような状況から、より多くの日本語教育関係者にプログラムレベルで日々の日本語教育活動を捉えることを提唱するため、プログラムの全体像を俯瞰的に理解できるツールが必要であると認識した。

そこで、プログラムの全体像や現状を記述し、可視化するために「プログラム可視化テンプレート Ver. 1」（札幌ほか2015）を作成した。Ver. 1では、日本語プログラムに関連する要素を網羅的かつ詳細に記述できるが、その一方で、複数のシート上に詳細な情報を記述するため全体像が把握しにくい、作成に時間と手間がかかるという声があった。そこで、プログラムの全体像をとらえやすくするため、札幌ほか(2015)を基に教師が関わる部分に焦点をあてた簡易版の可視化テンプレートの開発に取り掛かった^{注2}。そして、プログラム全体を1枚のシート上で見渡せる「プログラム可視化テンプレート Ver. 2」を作成した^{注3}（図1）。

3. プログラム可視化テンプレートについて

3-1 可視化テンプレートの記述目的

一般的に、プログラムの全体像を把握する作業は、コースを見直す、問題を把握する、

改善するなどの実際上の目的があって行われるものである。本可視化テンプレートは、冒頭で「なぜ、この可視化テンプレートを利用してプログラムを記述するか」の記述目的を記入することになっている。これは、記述の過程で「現状の記述」と「理想（計画）の記述」とが混在することを避けるためである。「分析のための現状の記述」なのか、「計画のための理想の記述」なのかを意識して記述作業を進め、記述できない箇所があった場合には、記述目的に立ち戻り、記述できない理由を考えることが鍵であると考える。

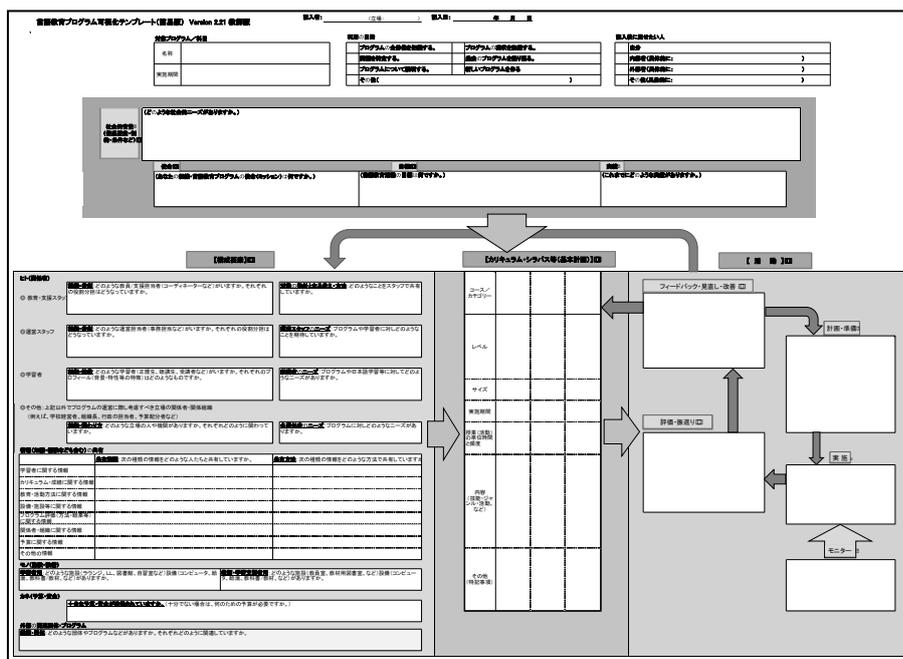


図1 プログラム可視化テンプレート Ver. 2

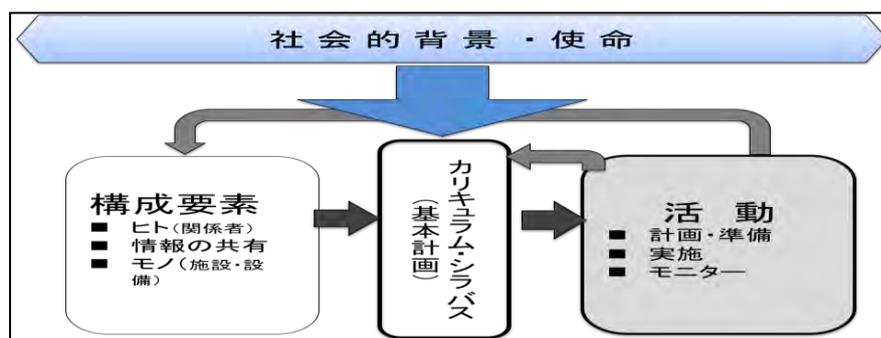


図2 プログラム可視化テンプレートの構造

3-2 記述項目の構成

可視化テンプレートの記述項目の選択にあたっては、欧米の言語教育プログラムマネジメント論や経営学、プログラム評価学（特にロジックモデル論など）などの知見（例えば Kiely & Rea-Dickins 2005）も参考に、プログラムはどのように構成され、どのように機能しているかをメンバー間で議論し、上述の「Ver.1」（札野ほか 2015）を作成した。今回のセッションでは、さらに議論を重ね改良し、【社会的背景・使命】【構成要素】【カリキュラ

ム・シラバス（基本計画）】【活動】の4つの大きな部分^{注4}（図2）で構成される「プログラム可視化テンプレート Ver.2」を用いた。以下に各部分を記述する狙いを述べる。

(1) 【社会的背景・使命^{注5}】

一つのコースがより上位のプログラムの下で組織されるように、プログラム自体もそれ単独で存在し得ない。そのプログラムが必要とされる、より上位の文脈である【社会的背景】があるはずである。その文脈を踏まえて初めて、そこで担うべきプログラムの【使命】（役割）も明確になる。さらにプログラムを実行するには実際に行う日本語教育に即したより具体的な【目標】を設定する必要がある。また、これまで継続されてきたプログラムであれば、目標達成の程度を示す指標となる何らかの【実績】があるはずである。以上の【社会的背景】・【使命】・【目標】・【実績】の4つを記述することで、プログラムが何のために何を目指して実施されるかが読み取れるようになっている。

(2) 【構成要素】

プログラムを実施するためには、様々な資源（リソース）が必要である。資源には、〔ヒト（関係者）〕・〔モノ（施設・設備）〕・〔カネ（予算・資金）〕といった有形のものだけでなく、それらに関する〔情報（知識・経験などを含む）の共有〕の方法といった無形のものもある。また〔外部の関連団体・プログラム〕等の外部との関係も資源として活用できる。

(3) 【カリキュラム・シラバス等（基本計画）】

プログラムの使命を全うするために、具体的な目標のもとにどのような日本語教育を行うかの計画が必要である。その基本的な計画を示すのが【カリキュラム・シラバス等（基本計画）】である。上述の4つ（社会的背景・使命・目標・実績）に加え、この基本計画を記述することで、そのプログラムの特徴を明らかにすることができる。

(4) 【活動】

プログラムの目標のもと、上記【構成要素】を利用して実際に日本語教育を行うには、事前に実施のための〔計画・準備〕が必要であり、さらにその計画通りに〔実施〕されるように〔モニター〕し、実施後はどの程度目標が達成されたかが〔評価・振り返り〕されなければならない。評価の結果、何らかの改善が必要だと判断されれば、そのプログラムの【カリキュラム・シラバス等（基本計画）】【構成要素】【活動】の該当する部分の見直しが求められる。〔計画・準備〕→〔実施〕→〔モニター〕→〔評価・振り返り〕で実際に行っていることを記述することで、日本語教育プログラムの実施手順を具体的に示すことができる。

4. セッションの実施報告

4-1 参加者とセッションの流れ

(1) 参加者

本セッションの参加者は31名で、「国内の高等教育機関に属する10年以上の日本語教育経験を有する専任教員」が半数を占めた。属性については、大学教員（常勤、非常勤）が半数以上おり、このうち数名は海外の大学所属であった。他の参加者の属性は、日本語学校、地域の日本語教室、日本語教師養成機関等の教員やスタッフ、日本語教育分野の博士課程で学ぶ学生などであり、今回のセッションには多様な立場で日本語教育に関わる人

たちが参加したことがわかる。セッション開始時に6人ずつ5グループ^{注6}のテーブルに分かれた。筆者のうち6名が各グループに1人ずつファシリテーターとして入った。グループ分けは任意であったため、大学等の高等教育機関同士のグループがある一方、多様な属性のメンバーから成るグループなどグループの多様性が生じた。グループディスカッションではどのグループでも可視化テンプレートを巡って熱のこもったディスカッションが行われ、結果的に可視化テンプレートが日本語教育プログラムの関係者間の対話のツールとして有効であることを確認した。

(2) セッションの流れ

セッションの流れを以下に記す。冒頭で本セッションの趣旨説明を行い、プログラム可視化テンプレートの概略と記述の際の注意点について説明した。次いで各自が自身のプログラムについてテンプレートに記入する作業を行った。その際、各グループに日本語学校、地域、大学等のプログラムの記述例のテンプレート集を用意し参照できるようにしたほか、各グループに1人ずつ配したファシリテーターが記述の際の疑問点に答える体制を作った。

個人での記述作業を終えたあと、グループ内でこのセッションを通して明らかにする3つの課題を軸にディスカッションを行った。休憩を挟んで後半の1時間では、グループで話し合った内容について全体でシェアし、本稿「1. はじめに」で先述した3つの課題について全体で意見を出し合った。

(3) セッションで得られた視点

可視化テンプレートを、プログラムを記述するための共通ツールとして広く利用してもらうためには、今回のような利用法のワークショップのモデルも検討する必要がある。

プログラムの記述目的やどの視点で記述するか、どの程度詳細に記述すべきかなど個人の実情に合う形で記述する必要がある。今回は6人に対し1名のファシリテーターがつき、必要に応じて個別に対応できたことが短時間での可視化記述が可能になったと考える。

その一方、プログラムを把握するためには、記入後のディスカッションが重要であるが、今回のセッションは180分間という時間内では、各グループでのディスカッションに十分な時間を割くことができなかった。今回の参加者からは「可視化テンプレートを書いただけでは改善点が見えてこない。これを使ってコミュニケーションをするプロセスが必要」との意見が出された。ここから、可視化テンプレートは記述するだけでなく、シートに記述されたプログラムを説明する過程も重要であり、その際にプログラムが記述されたシートが対話のツールとして使われることにより、記述した内容がさらに深まることが示唆された。今後、可視化テンプレートを開発する際、対話のツールとしての機能もきちんと果たせる工夫や対話ツールとしての活用方法についても併せて開発していく必要がある。

4-2 可視化テンプレートについての参加者の意見

今回のセッションでは、「1. はじめに」に記した3つの課題を軸に進めた。ここでは、グループディスカッションおよび全体でのディスカッションで出た意見、参加者アンケートからの意見を課題1、課題2、課題3の3つの視点で総括する。

4-2-1 可視化テンプレートの記述はプログラムを意識させるか(課題1)

可視化テンプレートを記述する作業そのものでプログラムが可視化できたかという問いもここに含む。全員が意識させられると回答した。今回の参加者の大半が日本語教育歴10年以上のベテランである。ディスカッションでは、現在、自分が関わっていない理念、運

営のことを意識することにより、上司に共感を覚えたり、自分もやがてその視点でプログラムを運営することになることを認識できたという意見もあった。大半は、現在のプログラムの問題点が見えたという回答し、問題点の優先順位を整理する糸口を得ている。その一方で、テンプレートそのものには問題点や理想と現実とのギャップを記述する欄がないため、具体的な問題の把握が難しいという指摘もあった。

以上より、可視化テンプレートを使ってプログラムを記述する行為そのものは自分のプログラムを意識させるなどの面で有効であるが、問題把握や全体像を捉えることを目的に可視化テンプレートを使用するためには引き続き改善の余地があると言える。

4-2-2 可視化テンプレートは日本語教育現場のどのような目的や機会に活用できるか(課題2)

プログラム可視化テンプレートはどのように活用可能であるか、ディスカッションおよびアンケートに出てきた具体的な活用方法を表1に示す。現役の教員にとっては記述することで問題点を確認し、情報を共有するというツールとしての活用案が目立った。また、理念や背景を意識するという視点こそ養成講座などに取り入れる必要があるという意見があり、そのツールとして今回のテンプレートに期待する声もあった。

表1. テンプレートの活用の可能性

使途	対象者	目的
対話ツール	同じ機関内の他部署 同僚教師 加盟校の日本語プログラム	情報の共有 目的の共有 意思疎通 議論材料
資料	教員同士	引き継ぎ資料として残す 新規に採用されたプログラムの基本情報を知る
申請, 交渉用の材料	機関外の人	予算承認を得る 機関のPRをする プログラムを紹介する
PRの材料	対外	プログラムを紹介する
就職活動	自分自身	各機関の情報をテンプレートで入手し、自分に合った学校を探す
教員養成講座, 研修ツール	受講生	理念や背景を意識させる

4-2-3 可視化テンプレートをどのように改善できるか(課題3)

テンプレート自体は肯定的に受け止められたが、可視化テンプレート記述後のグループ別および全体でのディスカッション、セッション終了時の参加者アンケートで複数から指摘されていた問題点を以下に述べる。今回のフィードバックについては今後の可視化テンプレート開発の際の参考にしたい。

今回のセッションでは、項目のレイアウトや欄の大きさを調整した可視化シートを使用したため、テンプレート冒頭にある「記入の目的」欄が設けられていなかった。参加者から「可視化テンプレートに書く目的がはっきりしていないと書きにくい」「同じ人が書いて

も時期や目的によっても記述内容が異なるため、記述目的は明確にすべき」との指摘があった。本稿3-1で述べたように「可視化テンプレートの記述目的」を明確にして記述することの重要性が参加者からのフィードバックで再確認された。

上記以外にも少数ではあったが、表2に示すような記入欄の大きさやレイアウトに関して記述しづらい点の指摘があった。ただし、今回のセッションは会場施設の関係上、紙媒体の可視化テンプレートを用いたが、本来はプロトタイプとして電子媒体で開発されたものである。背景や目的に応じて適宜カスタマイズして使ってもらうようにしていくことが望まれる。

また、可視化テンプレートに記述し、対話ツールとして使うことによって記述目的が果たせるという意見もあった。今後、可視化テンプレートそのものの書きやすさと並行し、対話ツールとしての使いやすさの視点でも開発していく必要がある。

表2. テンプレートに対する主な意見

<p>【社会的背景・使命】について</p> <ul style="list-style-type: none">・記述する際に視点が定まらず、書くのが難しかった。 <p>【構成要素】について</p> <ul style="list-style-type: none">・「情報の共有」は何を書けば良いのかわからなかった。・「情報の共有」は、書く内容が多いのもっと欄が広い方がいい。・「ニーズ」をどう解釈したらいいかわからない。定まらない。・「ニーズ」が誰から誰に対してのニーズなのかにより違ってくる。 <p>【カリキュラム・シラバス（基本計画）】【活動】について</p> <ul style="list-style-type: none">・単位外の活動、意図的だが明示しない教育活動を記入できない。・毎度、実施して予想外のことが起きるがどこに記入すれば良いのか。・質問文がわかりにくい。・準備計画、矢印部分を今回のプログラム1回きりのものへの質問と考えた場合、矢印に違和感がある。
--

5. 今後の課題

今回のセッションで、提案した可視化テンプレートを用いてプログラムを記述することの有用性について賛同を得ることはできたが、まだ実用性の面で改善の余地があることがわかった。第一の課題は、現場の教師が利用できるように、どのような項目が必要かを再吟味し、より使いやすい形に改善していくことである。第二の課題は、教師養成において、プログラムの視点から日本語教育活動を見ていく姿勢を育成することである。そのためには、大学、日本語学校、地域の日本語支援などのさまざまなプログラム事例を集めてそれぞれの特性を明示できるとよいと考える。第三の課題は、この可視化テンプレートに対話ツールとして用いて、幅広い日本語教育関係者間でプログラムの観点からの議論や、問題解決事例についての情報交換を可能にする「場（プラットフォーム）」を創出することである。この「場」では、これまで日本語教育現場で試行錯誤をしながら積み重ねてきた

プログラムの立ち上げや日々の運営、評価、改善に関する知見、ノウハウを共有し、各現場が抱える課題を共に検討、議論することが可能になると考える。これらの課題を解決しながら、日本語教師に自らのプログラムを俯瞰して理解することを促す一方で、より良い日本語教育を実現するためにプログラムの視点から議論する「日本語教育プログラム論」の構築を目指したい。

付記

本研究は、平成27～29年度科学研究費補助金挑戦的萌芽研究「日本語教育プログラム論構築のための基礎研究」（課題番号15K12901 研究代表者：札幌野寛子）の助成を受けて行われた。

謝辞

体験型セッションに参加し、多くの知見を与えて下さった参加者の皆様に心より感謝申し上げます。

注

- (1) 2004年に「言語教育プログラム研究のための読書会」として活動をはじめ、2006年以降は「言語教育プログラム研究会」として活動を続けている。
- (2) これ以外に、札幌野ほか（2015）を基に国際交流基金海外派遣関連研修用にカスタマイズしたプログラム可視化テンプレートも別途開発中である。
- (3) 今回のセッションでは、時間の制限を考慮し、焦点を絞って作業をしやすくするため項目のレイアウトや欄の大きさを調整した。
- (4) セッションでは、【社会的背景】、【構成要素】をそれぞれA41枚にし、【カリキュラム・シラバス等（基本計画）】と【活動】とをA41枚にし、合計3つに分けた。
- (5) 本来であれば【社会的背景・使命・目標・実績】と呼ぶべきであるが、テンプレートの各部分の呼称として簡潔にするため、テンプレートの当該部分を【社会背景的・使命】と総称する。
- (6) セッション途中で遅れて参加した1名はグループには入らず、ファシリテーター役が1人ついた。

参考文献

- (1) 隈井正三・松下達彦・渡邊有樹子・札幌野寛子（2009）パネル発表「日本語教育におけるプログラム評価」日本語教育学会（2009年度春季大会）、明海大学、2009年5月24日
- (2) 札幌野寛子（2011）『日本語教育のためのプログラム評価』ひつじ書房
- (3) 札幌野寛子・松下達彦・大河原尚・遠藤藍子・小池亜子・菅谷有子・鈴木秀明・田中和美・徳永あかね・ボイクマン総子（2015）「日本語教育プログラム可視化テンプレート開発 -プログラム構成要素と記述枠組みの検討」『2015年度日本語教育学会秋季大会予稿集』 367-368
- (4) Kiely R. & Rea-Dickins P. (2005) *Program Evaluation in Language Education*, Palgrave Macmillan.